



月刊

イ

ン

ド

Monthly Journal of the Japan-India Association

財団法人 日印協会 (日印間の政治・経済・文化交流に努力して 105 年)



新宿御苑を彩る日本の花 満開のさくら

目次

1. 新公益法人制度の概要と課題	p. 3
2. 最近のインド 医療事情	p. 4
3. 日印協会のホームページ更新状況報告	p. 11
4. 笹田事務局長のインド出張報告	p. 12
5. インドニュース	p. 16
6. 今のインド	p. 18
7. イベント情報	p. 18
8. 新刊書紹介	p. 18
9. 掲示板	p. 19

1. 新公益法人制度の概要と課題

現在日本国内で 2,500 を超える、財団法人と社団法人が活動しているが、昨今公益法人の活動内容や人員構成に大きな疑問が投げかけられており、この制度の見直しが行われ、今年の 12 月 1 日から新制度が施行されることになった。日印協会は新公益法人制度に沿って、新規に登録をする予定であるが、この新公益法人制度がどのようなものなのか？ その概要を以下に示す。

新公益法人制度による最大のメリットは、寄付金の免税処置等の税法上の優遇策が適用されること、難関な公益法人として認可されることによって、他の一般公益法人と一線を画して相応のステータスが与えられ、一段と重みを増すことにある。

その概要と課題は以下の通りである。

1. 改革の概要

- (1) 改革の内容： 現行公益法人制度を、登記のみで法人が設立できる一般社団・財団法人（以下 一般財団法人）と、公益目的事業を行うと公益認定等委員会にて認定された公益社団・財団法人に分離。（以下の記載は、将来的に、日印協会が進むべき、『公益財団法人』を主体に記載）
- (2) 制度の移行： 現行公益法人制度の見直しの結果、平成 18 年 6 月 2 日に法律公布、平成 20 年 12 月 1 日に法律施行、平成 25 年 12 月 1 日（5 年の移行期間）までに申請によって現行公益法人の移行を完了。申請なき場合は自動消滅。
- (3) 申請後認定されるまでは現行の法律が有効。
- (4) 公益財団法人の申請： 認定権限は内閣総理大臣または都道府県知事。
- (5) 主な認定基準：
 - 公益目的事業が主たる目的。
 - 公益目的事業に関わる収入が、その実施費用を超えないこと。
 - 公益目的事業比率が 50% 以上のこと。
 - 遊休財産が一定額を超えないこと。
 - 公益目的事業とは、『学術、技芸、慈善その他の公益に関する事業で、不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与するもの』。
 - 組織の改定（下記（7）参照）
- (6) 認定による効果（メリット）：
 - 『公益財団法人』の名称を使用可能
 - 公益財団法人並びに寄付を行う個人 / 法人の税制上の優遇措置
- (7) 組織の改定： 新制度により組織の改定が必要。
 - 評議員と評議員会の職務：評議員の選任 / 解任は定款に明記し、理事・監事の選任 / 解任等の法律及び定款で定めた事項を決議。理事会による評議員の選任は不可。理事との兼務不可。
 - 理事と理事会の職務：理事の選解任は、評議員会によって成され、法人の業務執行の決定、理事の職務の執行の監督、代表理事の選定・解職。評議員との兼務不可。
 - 評議員会及び理事会の議決権：評議員会及び理事会の議決権の代理行使と書面行使の禁止（代理人出席や委任状は不可）
 - 定款の改定：基本金は最低 300 万円（日印協会は現在 200 万円）

2. 日印協会の課題

- (1) 『公益目的事業』とは、「学術、技芸、慈善その他の公益に関して、別途定める表(23項目)に記載ある事業を指し、不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与」と定められており、別表中、1. 学術及び科学技術の振興の目的、2. 文化及び芸術の振興の目的、7. 自動又は青少年の健全な育成の目的、9. 教育、スポーツ等通じて国民の心身の健全な発達に寄与し、又は豊かな人間性を涵養する目的、15. 国際相互理解の促進及び開発途上にある海外の地域に対する経済協力の目的が、日印協会の主たる該当する目的事業と思われる。
- (2) 上記『公益目的事業』の遂行とともに、『不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与』とあり、通常の活動がこの認定基準に必要であるが、日印協会ホームページによって、『月刊インド』、『インド季報』、各種講演会/セミナー開催、『ナマステ・インドイア』の紹介を、不特定多数かつ多数の者への増進に繋がると理解する。
- (3) 評議員と理事の定足数や議決権は、新制度の下では代理人出席や委任状は認められないので、今後は具体的に対応策を検討していく。

2. 最近のインド医療事情

2月20日(水)に品川イーストクリニック(日印協会の法人会員)主催にて、日印協会後援の下、『第一回海外赴任医療支援セミナー』が開催されたので、その概要を報告します。最近企業から多くの駐在員をインドに派遣しているが、インドの医療事情に関する情報が十分ではないので、情報提供の場として、またインド旅行を個人で考えている方々への不安解消の面で、今回は非常に有益なセミナーであった。セミナー開始に当たって、インド駐在の長かった佐川 雄一氏より、『私を育ててくれたインド』との演目で、講演があったが、非常に含蓄のあるお話ですので、紹介します。引続き、東京厚生年金病院内科部長の横尾 朗先生による『最近のインド医療事情』のテーマで、また『期待されるとラベルクリニックとは』と題してユタ大学麻酔科教授の釜谷 比羅志先生より講演があった。なお、『最近のインド医療事情』についての詳細は、既に『月刊インド』2007年12月号に記載されているので、参照ください。

『私を育ててくれたインド』

佐川 雄一

I: 日印社会を比較すると:

一般論ですが日本社会は同質的、閉鎖的な村社会であるが故に、仲間内の同僚意識が強く、結束力に勝っています。反面、社会の特性が安定志向重視であるため、起業家精神は高揚されません。又、村社会では突出すると嫉妬と羨望の標的になるため、リーダーは育ちにくい環境です。

これに対し、他民族、多言語、多宗教、カースト制度、地域主義、更に発展途上の過程にあり且つ過大人口を抱えるインドは、日本と比べると遥かに複雑・多様な厳しい社会環境に置かれています。一例を挙げれば、親が遺した遺産の相続を巡って自らの信念(損得)に基づいて、兄弟間で骨肉の争いを起こすことも日常茶飯事です。家族の絆が強いインドでなぜこのような醜悪な争いが起こるのか理解できないかもしれませんが、これもインド

の現実です。

反面、多くのインド人は強い上昇志向を持ち、檜舞台での活躍を夢見ています。それ故に起業家精神が旺盛、生き様も前向き志向です。失敗すれば意気消沈がっかりしますが、暫くするとこれも運命と諦めてしまう、気持ちの切り替えが早い。

村社会型の日本と起業家精神旺盛なインド、何れも長所・短所があります。日本では現形特権益を享受できる階層(例：大企業)に入れば居心地のよい生活が送れますが、上層部を支える下部層にとどまる限り厳しい生活からの脱却は困難です。

インドは日本以上に格差の大きい社会です。この脆弱さを補うために独立後「民主主義」を大切に育ててきました。又、「多様性」を受け入れる寛容さがあります。インドは「民主主義と多様性」においては日本を凌駕しますが、「結束力、団結力」においては日本に分があると思います。

一言でくると個を犠牲にしてもグループを優先する日本人に対し、自らの生き様に基づいて行動するインド人と総括できるかもしれません。

II なぜインド人は世界で活躍できるのか：

それではなぜインド人は世界で活躍できるのでしょうか。

世界に大国として認知されるための前提条件は民主主義と多様性を備えることであると思います。19世紀の大英帝国、20世紀のアメリカは、不完全ではあったでしょうが民主主義と多様性を備えていました。そして現在のインドもこの条件を満たしています。同時にこの二つのキーワードは企業にとっても個人にとってもグローバルな社会に生きるための必須具備要件です。これに加えてインドの有識者には公正な判断力(Integrity)と勇気(Courage)を備えている人たちがいます。

更に、第三者が見習うに足る行動規範を有する有識者がいます。皆さんは驚かれるかもしれませんが、ITソフトウェア大手開発業者 Infosys Technologies の企業統治は世界で最も優れていると言われていています。トップが自らの行動を厳しく律するとともに株主に対する情報公開、説明責任、透明性を周知徹底しています。又、社員を大事にする会社でもあります。世界最大のトレーニングセンターをマイソールに完成し、社員育成に力を注いでいます。

なぜ民主主義、多様性、公正な判断力、勇気、行動規範がインドの有識者に備わっているのでしょうか、それは自分の哲学を持ち自分の信じる道を歩み続ける強い意志に基づいているものと思います。但し、ここで留意すべきはこのような有識者はインド 11 億人の内ほんの一握りを占めるに過ぎません。しかしリーダーが存在することは紛れもない事実です。

III：インド駐在は人生の分水嶺であった、インド人から学んだこと：

インド人から学んだことを数点選んでお話しします。

1. 最初の衝撃：企業トップの週末出勤：

強烈に考え強烈に仕事をする彼らの姿に接し、赴任前「働き蜂の日本人、自己主張はするが働かないインド人」とバイアスされた私のインド人観は見事に粉碎されてしまいました。

2. 優れた書籍類の出版：

世界最古の民主主義国家アメリカ、世界最大の民主主義国家インドと言われるとおり、インドは民主主義が発展している国です。インドでは言論の自由が確保されているため優れた書籍が多数存在します。建国の父；マハトマ・ガンジー、初代首相 J. ネルレー 等、インドの有識者は優れた書籍を残しています。インド理解を深めるとともに自己啓発を实践する最適の道はインドで発行された書籍を読むことではないかと考えます。

3. リーダーの確固たる行動規範：

年齢・地位の高低に係わらず、自分たちが実践してきたことを常に反省しながら己の言動・行動を律する人たちがいます。

4. 家族愛、礼節（カースト制度）：

貧富の差に関係なく家族愛がインドの家庭に幅広く浸透しています。最貧所得層が多い社会ですが治安・安全が比較的良好に保たれている背景には家族の絆が指筒できます。

5. 強烈に勉強する学生：

アルバイトをする大学生はほとんどいません。そしてかなりの数が大学院に進学します。自分は何をしなければいけないのか明快な目的意識を持っています。日印の学生を比較するとこれではとても敵わないと危機感を覚えます。しかし学生だけではありません。ビジネスの世界も同じです。

インドにどっぷり浸って 15 年が経ちましたが、最近日本人もインド企業で働いていけるのではないかと考えるようになりました。それはインド人にとって完璧ではないと言うことです。

日本人が築いてきた日常社会の原点「真面目、直向、一生懸命、誠実さ」を取り戻せば、日本再生の道が見えてくるはずです。

国も企業も市民も 10 年で大きく変革・進歩します。インドも 1991 年からスタートした経済改革が功を奏して 21 世紀はインドの世紀になると言われ始めています。日本の社会もこれからの 10 年で誰もが予想しなかったスピードで変革していくものと期待して止みません。

インド人にはとても敵わない!! と諦めるのは速すぎます。

佐川 雄一氏 略歴

PB Japan (株) 代表取締役

1992年～1998年まで、伊藤忠商事インド代表としてニューデリーに駐在。ニューデリー駐在中に日本商工会会長、日本人会会長を歴任。帰国後、外資系コンサルティング会社のPB社に勤務、現在に至る。



『最近のインド医療事情』

溝尾 朗

昨今のインド渡航者の増加にともない、インド滞在日本人の医療需要が増えている。それに応えるため、昨年10月インドのデリーとバンガロールにて医療事情調査を行い、その結果を第1回海外赴任医療セミナーにおいて報告した。本稿では、その講演内容を紹介する。

インドの病院は、外国人と富裕層をターゲットとしたトップレベルの私立病院、中間層を対象としたミドルクラスの私立病院、おもに貧困層が利用している公的病院の3層から成り立っている。今回訪問した病院の中から、トップレベルの病院として、デリーのMax Hospital、Indraprastha Apollo Hospital、バンガロールのBangalore Apollo Hospital、グルガオンのArtemis Hospitalを、ミドルクラスの病院としてバンガロールのPristine Hospitalを紹介した。

ほとんどのインド滞在日本人が利用しているトップレベルの病院は、どれも最新の医療機器、清潔な環境整備、一流ホテル並みのサービスを提供している。その中であえて甲乙つけるとすると、虚血性心疾患や脳卒中など生命に関わる疾患への救急対応能力と現地駐在員の評判を勘案して、デリーではMax HospitalとIndraprastha Apollo Hospitalを、バンガロールではBangalore Apollo Hospitalをお勧めしたい。

しかし、大都市以外の地方では、医師不足、救急医療体制の未整備、偽薬、輸血前感染症チェックの不徹底などの問題がまだまだ存在している。地方から飛行機で搬送が必要な重症例には、グルガオンのArtemis Hospitalはデリーの空港から最も近い私立総合病院であり、最も適切な病院であると思われる。

次にインド滞在中に気をつけることとして、環境汚染、交通事故、テロ、感染症を取り上げ、例をあげて解説した。特に感染症は駐在員が最も危惧していることの1つであり、狂犬病、ポリオ、デング熱、マラリアに関して、インドにおける頻度、治療上の注意、予防法について概略を説明した。最後に防蚊対策の1つとして、住友化学のOlyset® Net、テイジンのSCORON®を紹介し終了となった。日本とインドとの関係はこれからますます深まることが予想されるが、インド駐在員へのサポート体制は未だ不十分である。本講演が駐在員の生活をはじめ、企業の人事担当者や産業医によるアドバイスの一助となれば幸いである。

溝尾 朗先生 略歴

千葉大学医学部卒業 都立府中病院などの研修後、住友化学千葉工場産業医を経て、1998年から2001年までシンガポール日本人会診療所勤務。帰国後は東京厚生年金病院内科部長として勤務。2002年から日本旅行医学会理事、2007年からロングステイ財団評議員



熱心な聴講者

『期待されるトラベルクリニックとは』

釜谷 比羅志

現在、国際旅行医学の資格を取得した事からユタ大学のトラベルクリニックにも携わり、予防接種の事も含め日本の旅行医学事情とインドへ赴任する日本人が多い事からその関わりについて説明します。

昨今、日本の企業が海外に多く進出を果たし、特にインドへ赴任される方々が多い。まさに企業という大きな看板の影で頑張っている若い企業戦士がいる故、日本の企業もどんどん進出してゆける訳だが、若い人は病気になっても回復は早いという甘い認識があり旅行前の予防接種や健康診断、病気予防策にそれほど関心を払わない会社もある。赴任先で病気になれば能率低下、会社にとっても不利な状況や損害に発展する可能性も多い。もし、病気を予防出来るのなら、軽く済むのなら、積極的に手を打っておくに越した事なく、予防が最も経済効果の高い医療行為と言える。

残念ながら日本ではまだまだ予防接種に対する認識は低く、一昨年、日本国内で麻疹（はしか）が流行して大騒ぎになった。一部先進国では日本は伝染病の震源地であると思われるようで、予防接種の種類によっては何回か時間を空けて繰り返して受ける必要もある。数回必要な予防接種は中断するとまた最初からやり直さなくてはならない。また、何年置きかに追加接種を行い、免疫性を保持する必要がある項目もある。

品川イーストクリニックの昨年1月から11月までのデータを紹介しますと、(患者の総数は約800名) 予防接種を受けに来られた方の年齢は20~30歳台がトップ、男性は500名、女性は300名。クリニックに来院された方の海外渡航理由の1位はビジネス・出張、2位は観光・レジャー、3位は留学・教育。渡航先のトップ5は順に：中国、インド、マレーシア、アメリカ、タイ。受けた予防接種の種類は多い順に：A型肝炎、破傷風、B型肝炎、狂犬病、日本脳炎、腸チフス、麻疹となっている。

又、一時下火になった黄熱病は最近至るところで確認されている。黄熱病の発生国では国民にワクチン接種を積極的に行っており、現地の発症率は少なくなっているが、これを安全と誤解/油断してワクチンを受けずに旅行する外国人の発病が指摘されている。黄熱病は10年に一度、受けることを勧めている。しかし、60歳までに一度も受けていない人は反対に重篤な副作用を起こす可能性があるのであまり勧められない。60歳までに一度でも受けていれば何ら問題もなく、何歳になっても受ける事が可能。

ワクチンの話で、旅行医学で大きな課題となっているのは「マラリヤ」の感染とその予防。マラリヤは蚊が媒体となって伝染する病気で4種類あり、最も危険なのはハマダラ蚊の吸血により媒介される悪性の「熱帯熱マラリヤ」で世界的には3~5億の人がかかり、100万人の方が死亡している。日本でも毎年約100の方がかかり、5名の方が亡くなっている。特にインド、アフリカ、アジア、中南米にみられ、都会や衛生状態の良い所では問題にならないが、都市から離れた衛生状態の悪い所では予防薬や蚊にさ

されないように予防対策をとる必要がある。マラリヤの方もどんどん予防薬に対して抵抗力をつけて来ており効き目のある薬が無くなってきている。日本でも手に入るマラリヤ予防薬は限られているので現地での調達や、輸入に頼らざるを得ない状況。

私が所属しているユタ大学で最近話題になったことがあるので紹介すると、アメリカの病院も日本と同じように色々な形で資格検査、監査を受けている。JCAHO という監査機関があり、3年置きに徹底的にあらゆる医療機関の監査を行っている。最近、アメリカの人たちが海外の医療機関に出かけて行って医療を受けることが多くなってきているので、その監査機関が世界中の医療機関の審査に乗り出した。

これは、JCAHO の一部門で JCI という機関で、アメリカ国内の病院監査より少し甘いと言われているがこの監査基準を満たしたリストに載るという事は国際的に安全であるというお墨付きをもらったようなものだ。インドでは次項に『インド医療紀行(2007年10月)』としてリストアップされている医療機関。残念ながら日本の医療機関はリストには載っていない。

最後に、これからのトラベルクリニックは単に予防注射や予防薬の処方をする以外に提供できるサービスは色々あると考えられる。海外に赴任している社員の健康データの管理、確保、ワクチンの記録と予防接種の必要性の伝達、(定期的サービス)、旅先で病気や事故に遭った際のアドバイス、医療機関の紹介、現地医師との交渉の代行、緊急時に日本へ搬送する事態になった際のアシスト、旅行中・後の病気のフォローアップが可能な医療機関との連携、患者のニーズに合わせた健康に関する最新情報の提供、旅行保険会社への仲介、日本で手に入りにくい予防薬や予防グッズの提供、外国トラベルクリニックとの提携など。このような事をまとめてシステム化して提供するクリニックが必要となっており、可能であれば日本語の出来る医師や看護婦がいて、現地の病院の一部を使わせてもらい、日本人に医療行為が提供できるようなシステム開発も可能だと思う。ここのクリニックと関わりを持っていれば安心して旅行に出られる、という様に旅客に言われるような形に持ってゆく事が理想的である。

釜谷 比羅志先生 略歴

慶応義塾大学医学部を卒業後、相模原座間米軍病院でのインターン生活後、渡米。ユタおよびウェストヴァージニア州の大学病院で麻酔医として研修後、米国医師免許を取得。現在は在郷軍人病院およびユタ大学麻酔科の教授を兼任。昨年、国際旅行医学の資格試験に合格。現在、ユタ大学麻酔科教授・品川イーストクリニック顧問

『インド医療紀行 (2007年10月)』

品川イーストクリニックでは、2007年10月にトラベルクリニックの実態調査としてインドへの視察を実施した。近年、インドへ渡航される方々が増え、インドの医療に関するアドバイスを求める声が増えているので、最新のインド医療機関の紹介を以下にする。インドの病院は、トップレベルの医療技術と質の高いサービスを誇る富裕層向け私立病院、中間層や準富裕層を対象とした私立病院、および貧困層を中心に利用される公的医療機関の3層構造から成り立つが、今回は、訪問した12箇所のうち、8箇所の病院・医療施設を紹介する。

1) デリー・アポロ病院 (Delhi Apollo Hospital)

アポロ病院はアジアの中でも7000床を誇る最大の病院グループに属しており、過去の55000回以上の心臓手術は99%の驚異的な成功率を誇っている。日本でも珍しい64列マルチスライスCTスキャンを備えており、技術・設備とも充実した病院。国際空港への送迎サービスもあり過去5年間では6万人を超える海外からの患者も受入れており、名実ともにインドの病院として君臨。



インド初の国際的病院として認可

2) マックス病院 (Max Healthcare)

マックス病院はインドでは最初の包括的ワールドクラスの総合病院として2001年に操業を開始。ニューデリー鉄道駅より15kmのところであり、国際空港からはおよそ12kmの距離に位置する。2007年には1400床を目指す巨大病院として成長し、現在は400名以上のドクター、280以上の企業との契約、そして20万人の患者をかかえる。



ホテルのようなドアマンも常駐

3) フォーティス病院 (Fortis Healthcare)

2001年に最初の病院を開業以来、フォーティスは北部インドの6州において12の病院から成り立ち、インドでは2番目の病院ネットワークに成長。病院敷地内には入院患者の家族用宿泊施設や看護学校も備え、他のサービスとしては24時間営業の薬局や書店なども充実。集中治療室では患者と看護婦の割合が1対1という豊富な人材力からも成長ぶりが伺われる。



高度技術を誇る心臓外科

4) アルテミス病院 (Artemis Hospital)

2007年にアルテミス病院はデリー郊外のグルガオンに創設された。インドでも有数の先端技術を誇る病院の一つ。世界の優れた医師や医療専門家がこの病院で研修を行っており、国際ガイドラインに基づきこの病院は建設、500床から成り立ち、ペーパーレス、フィルムレスを実践、環境にも配慮。また、退院後のコンサルティング、空港送迎などインターナショナルサービスも行っている。



豪華でシンプルな病室

5) ロックランド病院 (Rockland Hospital)

ロックランド病院は 2004 年に操業を開始した比較的新しい総合病院。元々、ロックランドは病院、診療所、建築、メディアおよび教育の分野からなるロックランドグループとして 1986 年に創立され、現在では 130 床を超え、世界トップレベルでの診療、治療設備を備える。ニューデリー市内の静かで空気の良い環境に在り、近くには患者の家族の宿泊用ホテルも点在している。

6) ウォックハード病院 (Wockhardt Hospital)

インド南部を中心に展開する総合病院チェーンのウォックハード病院は現在 13 の病院を運営、米国ハーバードメディカルスクールとのネットワークも結んでいる。チェーンの中で 2 番目に作られたバンガロールのウォックハード病院は 400 床をかかえ、心臓外科、脳神経外科、整形外科、産婦人科、先端技術の腹腔鏡手術を誇っている。



CT 検査室

7) アポロ・バンガロール病院 (Apollo Bangalore Hospital)

アポロ・バンガロール病院はアジア最大の病院チェーンのアポログループでは最も新しい病院。殆どの医師は海外勤務経験者で、64 列スライスの CT、4D 超音波設備、デジタル X 線装置や外科手術のナビゲーションシステム等、高度技術を誇る設備を持っている。その他にも、ヨガスタジオ、小児科でのキッズルーム、インターネット完備の高級個室病棟など充実した病院として人気。



MRI の設備

8) サガアポロ病院 (Sagar Apollo Hospital)

1983 年にアポログループの病院を Dr. Reddy が創設以来、50000 件を超える心臓手術と 3000 以上の腎臓移植の成功率、98%を誇っている。後にこのアポロ病院と優れた医療一家である Sagar 家の家族経営の病院が合併しサガアポロ病院として誕生した。現在では、バンガロール最大の居住地区内に位置し、250 床、200 名余のインド国内外からの医師を抱えている。右はリハビリテーション設備



3. 日印協会のホームページ更新状況報告

昨年来より、新生“財団法人日印協会”を目指して、平林理事長を先頭に鋭意活動中であり、その一つの目玉として、今年日印協会のホームページの更新を大きな活動方針と掲げている。

このホームページを通して、日印協会の活動と日印関連情報の提供、各種イベントのお知らせ、日印協会への要望や意見の交換、出来るだけ早い時点でインド人も含めて海外の方々にも読んでいただけるような英文版作成などを、日印協会会員の方々のみならず、ネットワークを通じての広く一般の方にもアピールできるように、読み易い、理解し易い、情報が豊かなホームページを表現することが目的である。この目標に向けて、既に数社から更新の具体化の提案書を受けて、検討した結果、今のところ一社に絞って、より視覚的な画面の構成を試作し始めたところである。

6 月頃には新しいホームページとしてアップすべく作業中ですので、ここに中間報告すると共に、今しばらくの時間猶予をお願いします。

4. 笹田事務局長のインド出張報告

日印協会の笹田事務局長が、インドに出張しましたので、概要を下記に報告いたします。

インド出張報告

日印協会事務局 笹田勝義

2月16日より、久しぶりにインドへ出向いたので、ご報告いたします。

出張業務としては、インド進出企業への日印協会のPRと入会への側面補助の協力依頼や日印交流年事業の一環のインドでの写真展視察等がありましたが、業務報告は事務所内で行いましたので割愛し、ここでは『今の、生のインド』を、この誌面をお借りして感じたままに報告いたします。訪問地はニューデリー、バンガロール、ハイデラバードの3都市7泊でした。筆者は1996年から2002年まで6年間ニューデリーに駐在員として滞在した経験を持つが、6年前の企業駐在員として見たインドと比較しつつ、日印協会員として見た『再発見のインド』を語ってみよう。

何年か振りのインド訪問であった。2月といえばインドではベストシーズンであり、昔を思い出しながらの出発準備をして、成田空港へ向かった。エアインディアのご好意により抑えていただいていたフライトに乗るべく、チェックインカウンターで搭乗手続きを開始した。ふと見ると、隣に何処かでお会いしたことのある方が同じく手続き中である。何とその方は、仙台在住の日印協会の会員であった。昨年入会された方で、インドに行くなら12~2月頃とお話した記憶が筆者にあり、その方は初めてのインド旅行に、正にその時期を選ばれていたのだ。事前にこの日に旅行するとはお互い知る由もなく、全く偶然にも成田空港で出会ったのである。そのような奇遇から、この『再発見のインド旅行』が始まった。

ほぼ満席の乗客を乗せて、成田空港を定刻に離陸し、快適に約8時間のフライトを楽しんだ。いつものように(筆者の駐在時代の癖)右側に席を取り、遙か彼方に、ヒマラヤ連峰を見つつ、エベレストを懐かしく眺めているうちに、着陸の時間となった。しかしデリー国際空港が混んでおり、着陸時機で1時間半ほど遅れての到着であった。駐在員の頃には余りした事がない空港での両替してから、無事出迎いの車に乗り込み市中へ向かった。先ず目にしたのは、予てより聞いてはいたが、空港と市内を結ぶ幹線道路が片側4車線と格段に増えていたことだった。そして、あちこちに建設されたフライオーバーだ。デリー空港は一部改装中ではあったものの、昔と殆ど変わらぬ趣であったが、道路事情は大幅な変わりようだ。車線が増え、土曜日の夜とのことで車の数は相変わらず多く、道路一杯に車で溢れかえっていた。渋滞こそなかったが、大量の車に目を奪われた。立派なフライオーバーも沢山建設されており、渋滞解消に大きく寄与しているのだろうなと感じた。



新たに建設された4車線道路



トールゲートで順番待ち



トールゲート出口での順番待ち

翌日デリーの有名な観光箇所であり、市民生活の市場でもある、オールドデリー地区のチャンドニチョークに出向いてみた。日曜日のため商店街はクローズしていたが、道一杯に露天商が店を開いて、客の呼び込みが盛んであった。客筋も、扱っている商品も、商売の仕方も昔のまま。インドの発展、近代化は著しいといわれても、ここの伝統的商店街は日態依然としており、変化激しい道路事情とは雲泥の差がある。街の発展も宜しいが、今のインドであり、かつ昔のインドであって、このような伝統的(些か古臭くはあるが)な雰囲気は、残しておきたい気持ちでもある。

道路事情の大変化と、一方変わらぬインドの風景の中で、今一つ思うことは、牛と物乞いの数だ。牛は神の神聖な乗り物として崇められているが、それがために道路を闊歩する牛が昔は非常に多かったのだ。牛は決して『野良牛』ではないが、日中は所構わず餌を求めて路上にたむろする。数が多くなれば交通渋滞の原因となる。これが一掃されたのか、市内では非常に数少なくなっている。また、物乞いも、これまた殆ど路上で見かけなくなっていた。どの交差点にも、手が無い、足が不

自由だ、目が見えないなどの身障者や乳飲み子を抱えた若い母親が車の窓をコツコツと叩いて物乞いする姿を必ず見たものだが、それが激減している。多分首都にそのようなことがあってはいけないとの行政指導による排除もあるのだろうが、やはりインドも多少は豊かになってきたのかなとも感じる。

しかし、この社会変化が本当にインド人にとって幸せなのだろうか？日本を含めて先進国の歩んだ道にはそれなりに意味があったのだろうが、中国、或いはインドが同じく先進国化しなければならぬのか、甚だ疑問に思う。決して先進国の人間だけが生活をエンジョイすべしと差別化する積りはないが、何千年と続いた生活様式を守っていくスローライフと社会規範があってもよいのではなか。

とは思いつつも、その足で、文明の利器の一つであるデリー地下鉄に乗車してみた。ニューデリーでは2002年12月に開業した。都市化の一環として、また、渋滞緩和の特效薬として発足したが、開通当時は、インド人の特性から直に車体が汚されるであろうし、乗車賃も安くなく、開業区間もまだまだ狭いことから、どれほどに利用度が上がるか多少の疑問視もあった。しかし、開通以来5年半経った今、営業路線距離も圧倒的に伸びたこともあるが、極めて安定的に運営されている。吃驚したことは、車両、駅舎、通路、ホームが実に綺麗に管理されていること、管理システムが素晴らしいこと、乗車マナーが悪くないことであった。インド経験者ならお分かりかと思うが、カルカッタ地下鉄でも国営鉄道でも、この観点では全く当てはまらない。だが、残念ながら、改札口では不慣れのせい、大勢のインド人が戸惑っていた。入場の際にチケットに相当するプラスチックコインを窓口にて購入し、そのコインを自動改札機に挿入して入場するが、やり方が判らず、また出場するにもこのコインを入れるが、やはり戸惑いもたまにしているため、人間が一気に溜まってしまう。尤も筆者も案内してくれたデリー地下鉄関係者が居たからすんなりと通過したが、居なければ同じように渋滞の原因になっていたことだろう。兎に角インド人にとって新しいシステムであり、言葉が通じない(こともある)こともあって、まだまだ身についていない。街中では地下鉄建設工事で、道は車で溢れ返っているが、やがてこの渋滞も幾らかでも緩和するのか？人が地下鉄に流れて緩和の傾向が見えると、インドはモータリゼーションの真っ最中、反作用的に一段と車両数が増える懸念もある。また、一般道からの高速道路(前述の4車線道路)への接続には、大きなロータリーで円を描くように進入していくが、ロータリーの中には巨大な緑地帯が設けられており、これがデリーかと思われるほどの大きな違いであった。幹線道路の交差はフライオーバーが建設されており、昔のように信号待ちで延々と待たされることは少なくなったようだ。この印象はデリーのみならず、バンガロールとハイデラバードでも全く同じである。両都市ともフライオーバーの充実が評価に値する。ハイデラバードでは街中のフライオーバーは空港の前の道だけであったが、今や町のあちこちに見られるようになっている。しかし、これもまた、渋滞が緩和されるが故に、更に一段と車が増える要因かもしれない。それにしても車の量が格段に増えている。しかも車体が綺麗になっていることも、目新しいことだ。昔は『これでも車か!』と思われる程の車が蔓延していたが、海外のカーメーカーの台頭により、新車が安く供給されるようになったせいなのであろう。



4車線の幹線へ接続するロータリー



大きな緑地帯が見える

改めて認識したことは、交通マナーである。この度は3都市を回ったが、都市によってマナーの程度に大きな差があることに気が付いた。海外旅行経験の多い読者にはよくお分かりかと思うが、兎角海外では一般に交通マナーが悪い。インドもこの例に漏れない。しかし、都市によって程度に差がある。最悪なのがバンガロールであった。次にハイデラバード、デリーはまだまだマナーが良い、『あのデリーでか?』と思われる方も居るかもしれない。デリーで車に乗っていると恐ろしいと感じる瞬間が何度もあったが、バンガロールでは、その瞬間が連続しているようであった。これは幹線道路が少なく、渋滞が日常茶飯事であるため、少しでも前に進もうとの気持ちの表れなのだ。車との、人間との、そして牛との接触事故は絶え間ない。しかし、スピードが出せないが故に、死亡事故などの大惨事は余りない(?)

更に強烈な印象は、交通量が圧倒的に増えたと実感する反面、ガソリン代の高騰である。今のインドでのガソリン代は日本とほぼ同じ価格だ。昔からガソリン代は高かったが、概ね日本の半分以下であった。物価水準から一般消費額は日本の20分の1ほどの開きがあると思うが、ガソリン代に限っては言えば、この計算が通用しない。世界の車メーカーがしのぎを削ってインド進出を図り今や車大国になりつつあるインドにおいて、車の増大は圧倒的であるが、果してこれほど高いガソリン代を払ってまで車を持つ必要があるのだろうかとも思う。でも、インド人はステータスを重んじる民族であるから、車を持つことが重要なのであろう。流れに抗うことは出来そうにもない。

道々、高層ビルディングが建ち並び、昔のレンガと土壁の家しか並んでいなかった地域が大変貌している。デリーでは、是非とも最新のショッピングモールを訪れようとしたが、時間の関係で叶わなかったが、道路沿いのビル群を見る限り、そのモダンさを想像するに難くない。各都市とも共通的に町の建物の風情がかなり変わってきている。オールドデリーこそ変化がないが、新興地の変わりようは目を見張る。高層ビルの多さとその内部には、ここがインドかと思わせるようなモダンな造りとなっている。世界のブランド品も溢れかえっており、豊かな物量にも圧倒された。如何に世界の企業がインドを注目しているかの象徴であろう。日本企業のインド進出も著しく、次第に注目度が上がってきていることを、また、日本企業のインドへの注目度を更に高めるには、日本側にてインド PR をより積極的に送り、その手助けを日印協会がしていかなければならないと、現地にて痛感した次第である。

デリーでは新興社会性のために、昔はスーパーマーケットがなかったが、今や精神資本社会構造が変革化し、スーパー、デパート等が多数開店している。以前は欲しい品物は街中においては殆どなく、やむを得ず、日本、シンガポールやバンコク辺りから日用品を手に入れていたことを思えば、隔世の感である。ブランド品や自由に選択できる品数、量、日本品販売も含めて欧米化された店舗が沢山あるという。実に開かれた国になって、生活を謳歌できるようになってきたと真に実感する。しかし、忘れてはいけないことは、このような環境をエンジョイできるインド人はほんの僅かであること。まだ、人口の半分が、食うや食わずの生活を余儀なくされている人達だ。一人当たりのGDP で言えば、日本は約30,000米\$だが、インドでは近年上がってきたとは言えまだ800米\$程度だ。前述の大都市に生活するインド人は成長する中間層といわれる人種で、収入も多い。しかし、彼らがインドの平均ではない。

日本人向けの日用雑貨、日本食材が市内で手に入る事が判った。正確には筆者が帰国した直後に日本人経営者による日本製品を主体とするスーパーが開店した事だ。筆者が居る頃には、日本食材や日用品は入手不可能であった。インド人は宗教的理由や生活習慣の違いから購入することはないが、日本人にとってはどれ程に助かっているかと思うと感動に値する。既に開店5年ほど経つので現地に滞在される日本人諸氏には目新しくないであろうが、何もなし時代を経験した筆者には、いつでも必要品が手に入ることは大変な驚きである。その店名は『大和屋』である。筆者から言わせると、店内には、最小限度かもしれないが、『何でもある』と言いたい。日本食レストランも徐々に増えてきているが、このような日本食材や雑貨が直ぐに手に入られることは本当に心強い。因みに、米を除くと、ザックリと言って日本の3倍の価格だ。しかし現地ではお金に変えられない、絶対的に必要な物資が容易に手に入ることは、掛買いのない価値だと思う。兎にも角にも、筆者にとっては単にその店の存在を知らなかっただけだが、全く新しい発見ではあった。

以下の写真は、『大和屋』店内の様態である。日本食材や肉魚の冷凍食材、日本製品の日用雑貨が沢山販売されている。



今回の旅には、筆者の知己の友人であり、駐在員当時から大変にお世話になっていたインドの方から、インド出張中の宿泊設備（ゲストハウス）を提供いただき、デリーでのゲストハウスでは、経営する企業の新入社員が7名ほど宿泊しており、夕食など一緒に過ごす機会があった。全員が南インドの出身者だが、殆どがベジタリアンで、肉もアルコールも口にしない。南インドの食事は通常はバナナの葉を皿代わりにカレーとライス盛って、直接に素手(右手)で食べるのが通常であるが、筆者にとっては個人宅で食べたことが余りなく専ら名の知れたレストランで食べる事が多く、やはりナイフ、フォークの世界の経験であった。若者たちが実に巧みに右手を使ってカレーを食べる姿を見て、本当に感心した。若者らしく大量に食事を平らげ、南インド特有の最後にヨーグルトとライスを捏ねて食べるが、皿を舐めるかの如く、見事に何もなくなってしまう。食事中、筆者の息子より若い彼らと話していると、仕事のためとはいえ、仮住まいで不自由な生活でも、また、辛い仕事(深夜勤務など)にも、いやな顔一つせず与えられた仕事に邁進しているのがひしひしと伝わってくる。何故にそこまでさせるのかと問うと、言葉の端々に、先進国に負けず、追い越せ、それがインドのためであり、自分のためになると強く認識していることだ。以前は若者たちと接する機会が多くなかったため、改めて、インドの将来を担う青年の若さとインドの良さ、素晴らしさを実感したのである。

ハイデラバードでは、文化人との交流を図ることが出来た。インド伝統文化の継承者であるインド古典舞踊家2名とインドで日本文化の紹介に活躍している人たちである。インドを代表する舞踊家の一人は、Kuchipudi ダンスの名手で、以前日本にも公演に来たことがあるそうだが、大変な美貌のダンサーであった。自宅まで出掛けて話をお聞きしたが、日本ではオデッセイ、バラタナティウム、カタカリなどは名が通っているが、クチプディは今ひとつだと嘆いていた。もう一人のダンサーは同種のダンスだがインド音楽の歌手でもある。不躰ながら、即席で一曲歌ってもらった。流石に豊かな声量と透き通るピロードのような声質に魅了された。愚問ながら尋ねた、『立ったまま、或いは正座では判るが、インド音楽は胡坐をかいて歌うのに、何故そんなに腹の底から強く歌えるのか?』彼女からは『訓練なのよ!』と一蹴された。彼女は未だ日本には来たことがなく、クチプディダンス普及のためにも日本を訪問したいと切望していた。

一方日本文化を紹介する人々は、生け花、折り紙、剣道であった。生け花は小原流の免許皆伝(?)で、ハイデラバードで手広く教室を開いている。こちらでも自宅へお邪魔して昼食まで食べたが、家中和風の雰囲気溢れている。折り紙教師も小学校から大学まで各年齢層に広く折り紙文化の普及に努めている。剣道家は、インドで唯一の有段者(4段)の医師であった。彼の悩みはインドでは竹刀のみならず武道具が全く手に入らないことで、日本から寄贈してもらえないかと訴えている。これらの武道家含めた文化人に共通することは、如何に自分たちの文化を日本へ紹介するか、逆に日本文化のファンをインドに如何に沢山作るか腐心していることだ。筆者は日印協会にお世話になって以来感じることは、究極的にはインドとのビジネスを展開するに当たって、先ずはやはりお互い何を考えているのか探ることから始めなければならぬが、その第一歩がその国の文化に触れることではないかと思う。それが全てとは勿論言えないが、日本人にとって、インドの文化に触れること(理解するとまでいかなくとも)が、良好な日印関係構築の最も手取り早く、確実な手段ではなからうか。インド文化人と接して新鮮さは気持ちになったことは事実である。



『剣道印度』の免許頂いた筆者を囲んで



左より折り紙教授と剣道指南



生け花教授の和風自宅にて



『Golden Dragon』からの名誉免許



インドで著名な Kuchipudi ダンサー



写真中央がお世話になった Rama Bhadra 社長

筆者が駐在時代にはインドの名門クラブ『デリーゴルフ』の会員であったが、時間の合間を見て、ゴルフ場を覗きに行った。多少改良されている雰囲気はあったが、昔のまま、懐かしく見ていたら、筆者がデリーで社宅として借用していた家のオーナーにばったりと出くわした。デリーの人口が1300万人、筆者がインドへ出掛けるのは年に1度あるかないかなのに、とてつもない低い確率の中で、偶然にも、そのオーナーに会えたのは奇遇そのものであろう。インド旅行初日に続く偶然の出会いであった。懐かしさの余り暫し立ち話ではあるが旧交を温めることが出来た。オーナーもデリーゴルフのメンバーで、よく一緒にプレーし、自宅に招待もしてもらい、一般的な大家と店子の関係以上の良好な付き合いをしていたので、本当に懐かしく、嬉しい思い出であった。実業家であるオーナー曰くは、インド経済は昇り竜のごとく、留まることなく発展しており、バブルが弾けると、海外投資が増え、特にODA絡みでデリー-ムンバイ幹線プロジェクトで一段と海外、特に日本からの流入が期待できるも、その反動がどうかと警鐘を鳴らしていた。

日印協会の宣伝をさせて貰おうと思い、デリーの日本人会の事務局を訪れた。事務局には日本企業の新任の駐在員が住宅の罹災に偶々来られていた。昨今のデリー住宅事情も悪化の一途のようで、おれそれと希望の地に借家を見出すことは容易ではないらしい。その方も大変お困りであったようだが、日本人会事務局としてもアドバイスだけでそれ以上のことも出来ず、暫くしてからお帰りになった。お見かけしたところ、大変に若い方だったので、名刺こそ交換したが、もうお会いすることもなからうと思っていた。無事インドの出張も終え事務所に出勤して、通常業務を開始したところ、一人の方が何気にふらっと事務所のドアを叩き、インドの情報をくれと仰る。勿論可なりと書物をご覧になるなり、ご質問をして下さいと一般的対応をしていたところ、ごく最近、彼のご息子がデリーに駐在員として出掛けたので、最近のインドのことが判らない(昔出張で数ヶ月インドに滞在された経験あり)から、インド情報を集めて来たとのことであった。お話をするうちに、突然デリーの日本人会事務局で出会った人のことが頭に過ぎった。デリーで頂いた名刺をお見せすると、何とその駐在員の父君であった。デリーでお目にかかった駐在員と、数日後に何の脈絡もなく、その方の父君に日印協会事務所で巡り合うなど、奇遇以外の何ものでもなからう。駐在員も父君も筆者もその稀たることに、心底驚愕した。これを縁に父君には日印協会の会員になっていただいた。若い駐在員には向こう5年間駐在を義務付けられているそうだが、環竟厳しいデリーの生活ゆえ、奥様共々健康に留意され、業務を全うされることを祈念します。

企業の駐在員の目からは少し離れた角度でインドを見ようとしたが、一週間でインドを見詰め直そうなど、おこがましく、まだまだ多くの魅力を発見できぬまま、インドを後にしてきた。出発初日から、奇遇の連続であったが、いずれまた、再度の『インド再発見の旅』をしたいと思う。

最後に、この度の出張には、多くの方々に沢山の好意をいただいた。特に、旧知の仲である Asa Bhanu Technical Services 社の Rama Bhadra 社長とスタッフの面々には、一方ならぬお世話になった。インドではホテル事情が悪化の一途をたどっており、今や一泊4~5万円を出さなければ宿泊できないが、同社の特等のご高配により、同社のゲストハウスに全期間、3都市とも無償にて宿泊させていただいた。また、車の移動手段も快く提供いただき、頗る快適なインド出張を終えることが出来、改めて、この誌面を借りて、Rama Bhadra 社長とそのスタッフに、衷心よりお礼を申し上げます。(上記写真参照)

5. インドニュース

メディカルツーリズムならインドが最高

日本人のためのメディカルケアの観点からインドの医療事情は前述の通りだが、国際的にもインドの病院は最新の設備と医療技術を持った医師団とで、欧米諸国の医療に引けをとらないと評価されている。医学治療のためにインドへ出向くメディカルツアーが盛んに催されており、多くの外国人が信頼できる医療技術と安い治療費を謳歌できるインドへ旅行している。欧米で医療技術を学んだ医師60万人、看護師100万人がインドで働いている。費用的には、例えば心臓バイパス手術は、米国では240万円、英国で200万円、シンガポールで100万円、タイで79万円するが、インドでは60万円、美容整形では、米国200万円、英国100万円、タイ35万円に対してインドは20万円だそうだ。

今年度の経済成長率は9.5%

エコノミックタイムスによれば、インド実質GDPは昨年度8.8%であったが、今年度は9.5%になると予測した。企業全体の設備投資、製造業と建設業の生産が盛んであることに起因。鉱工業11.4%、サービス業10.4%農業が2.9%の成

長と見込んだ。国内インフレ高進や金利高止まり、世界経済減速の影響で下降修正の調査機関が多い中、楽観的見方との評価もある。IMFでは、7.9%と予測している。

インフレ率は一時的に7%

同じくエコノミックタイムスによれば、高成長率の反面、物価インフレは2008年中に一時的に7%になると予測。年度としては6.5%と見ているが、食料、燃料、金属などの一次産品の国際価格が高止まりのためと読んでいる。

デリー、ムンバイホテル宿泊費高騰

ビジネスラインによれば、両都市のホテル供給能力が著しく低く、需要を賄い切れず、異常に高騰している（具体的金額は出ていない）。両都市のみならずインド主要都市においては同じ傾向。2010年までにインドでは15万室不足すると。このため、インドで開催される予定の国際会議などは近隣諸国へ変更される恐れがある。

しかしビジネススタンダードによれば、チェンナイ、バンガロール、ハイデラバードではこの1年間で客室供給量が大幅に増え、むしろ供給過多になるのではと予測している。3都市とも順調にホテル建設（チェンナイで19ホテル、バンガロールで39ホテル、ハイデラバードでは2,200室）が進んでおり、2010年頃には、供給量が十分との見方だが、ホテル代は何故か下がる見込みがない。

ナノ試作車2台完成

先々月号でTATA自動車は、1ラックカー（28万円）を自動車ショーで展示したこと紹介したが、ビジネスラインによれば、テスト走行用として、その2号、3号車が完成した。量産工場（パントナガル工場）としての正規の生産ラインで製作された。10月の販売開始に向けて、車両のテストが行われる。

そのTATA自動車は、この夏に東証へ上場する。時事通信社によれば、インド企業など日本の株式市場への上場が難しかったが、昨年の法改正によって株式に近い日本預託証券方式にて、日本株式市場へ上場することになった。

インド企業、女性雇用拡大

インディアンエクスプレスによれば、インド企業で重要ポストに就く女性が増えてきており、女性雇用拡大やボーナス増額を行っている。多くの企業が女性中心の企業であると自社PRを行っており、女性の関心を集める。ある企業では、04年の女性雇用率が13%に対し、06年度は21%へ拡大した。インドの生活慣習も少しずつ、変化してきている。

デリーは夏の真っ盛り

デリーでは今が一番暑いとき。タイムズオブインディアによれば、既に気温は40度を優に越しており、路上で暮らす人の何十人かが死亡した。最低温度も25度で、何処の日陰に行っても熱風の嵐に襲われる。路上で渋滞中の車の中では、クーラーも満足に効かない。これからますます気温は上昇する。

海外の航空会社 インドへの乗り入れ

シンガポール航空、マレーシア航空、キャセイパシフィック航空はインド便を増強している。キャセイは子会社分含め香港からインド主要都市まで週35便、シンガポール航空はシンガポールよりインドまで週25便、マレーシア航空はクアラルンプールからインドまで週33便となる。日本関係では、JAL、ANA共に週7便であるが、ANAはインド最大級の民間航空会社 ジェットエアウェイズとコードシェアとマイルージ提携をする予定（5月21日）である。またANAはスターアライアンスの加盟会社であるので、シンガポール航空などと同じ連合として、活用幅が広がっている。

ロイヤルホストでインドカレーフェア

ロイヤルホールディング社のプレスリリースによれば、ファミリーレストランのロイヤルホストでは6月中旬から9月初めまでインド料理学院監修の本格的な『インドカレーフェア』を開催する。日印協会の会員でもある、レヌ・アローラさん（アローラ・インド料理学院長）が、インドの家庭料理を紹介する。名古屋駅ビル店を除いたロイヤルホスト316店舗でインドカレーフェアを展開する。

6. 今のインド

4月上旬に今や恒例となったミス・インドの選考会が行われた。インド女性は美人が多いことで有名ではあるが、昨今一段と欧米化された女性が美人の尺度とされているようで、欧米人と何ら変わらない美しさを醸し出している。それが今のインドであろう。



写真はインド駐在中の商社マン吉野宏氏提供

7. イベント情報

インド映画（ポリウッド・ベスト）開催

今年のベルリン国際映画祭では、インド特集が組まれており、『ポリウッド映画』の名称で親しまれている代表映画をこの8月から東京、名古屋、大阪の各地で興行されるので、先立って本誌にて紹介する。映画内容と詳細は、チラシを同封するので、参照ください。なお、価格は未定ですが、日印協会会員であれば、通常の割引前売り券より更に割引いて販売する予定とのこと。上映映画の内容は下記。

「DON 過去を消された男」

国際的な犯罪組織を仕切るドン。大追跡の末にドンは逮捕され、組織壊滅を狙う警部は、顔がうりふたつの男を組織に潜入させる。それを知るのは警部と男だけ。だが事故で警部が死に全ての事実が消滅したとき、ドンとして警察に追われることに！手に汗握るアクションと驚愕のどんでん返しが連続し、絡み合う人間ドラマが圧倒するサスペンス・アクション！

「たとえ明日が来なくても」

ネーナはニューヨークに住むインド人女性。父は死に、母と父方の祖母は喧嘩ばかり。父が残した借金も母を苦しめていた。長いこと笑顔を忘れていた彼女の心を和ませるのは、ドジな男友達口ヒだけ。ある日、近所に快活な男性アマンが越してきた。アマンはネーナに恋をするが、なぜかネーナと口ヒの仲を取り持とうとする。その隠された理由とは・・・美しいセリフがちりばめられた号泣のラブストーリー。

「家族の四季 愛すれど遠く離れて」

大富豪のライチャンドは長男ラーフルの結婚相手を決めるが、息子は庶民の女性アンジャリを深く愛していた。実はラーフルは、本当の家族として大切に育てられた養子だった。愛のために父に背いたラーフルは、心が張り裂ける思いで家を去り、アンジャリとイギリスで暮らす。弟のローハンは、何とか家族の絆を取り戻そうとイギリスに向かった・・・。ゴージャスな 雰囲気の中で、家族の絆が心を打つ大作。

8. 新刊書紹介

通常はこのアイテムでは、インドに関わる新刊書を紹介しているが、日印協会の平林博理事長が、元駐フランス大使の経験を踏まえて、フランスを捉えた著作をされたので、紹介します。

『フランスに学ぶ国家ブランド』

平林 博著

朝日新書刊

定価 本体 740 円 + 税

ドゴール将軍は「偉大さがなければフランスではない」と言ったが、経済規模や人口から見ると超大国ではない。しかしフランスには独特の「国家ブランド」がある。国際社会で独特の存在感をもつフランスの「国家ブランド」とは！



9. 掲示板

日印協会へのご意見

日印協会は、この半年間、新しい運営方針の下で活動をしてきましたが、まだまだ十分な実績を残すに至っておりません。今後日印協会がよりアクティブな活動が出来るように、新規会員の開拓、会員へのサービス、『月刊インド』/『インド季報』などの資料作成、イベント開催など、会員各位の貴重なご意見、アドバイスをお願いいたします。能力、マンパワーやツール不足で全て対応することは難しいかもしれませんが、極力会員のご意見、ご意向を今後反映していきたいと思っています。

表紙写真とお詫び

今月の表紙写真は、手嶋 雅人氏によって撮影された新宿御苑での、満開の桜風景です。先月号にて記載しました『今のインド カイラス山』の写真は、インド駐在の吉野 宏氏より提供いただいた写真ですが、「チベットの僧テンジン・プリヤダルシ上人よりのご寄贈」であること付記して、お詫びと訂正を致します。

編集後記

日印協会の活動内容を広く知っていただくツールと考えているホームページのリニューアルについては、もう暫くすると本格的に公開できると思います。公にアップした後、会員の皆様にはこのホームページを通して、種々の意見交換や最新の活動状況をご報告できると考えております。

新公益法人制度についても、税法上の優遇措置や新しい公益法人としての独占的使用権の活用などのメリットを目指して、遠からず政府関係省庁へ申請予定である。そのためのご協力とご支援をお願いすることがあるかもしれませんので、宜しくお願いいたします。

次回の会報『月刊インド』の発送日

08年6月号の発送は6月13日(金)の予定です。協会会員に呼びかけたいインドに関する各種お知らせを、チラシにして封入しませんか。

なお、08年7月号は、7月は半月の発送予定ですので、催事広報のためにチラシ封入をお考えの方は、この期間の発送予定日を参考にした上でお申込み下さい。

～ 日印親善の輪を広げよう ～

法人会員・個人会員としてご入会ください

日印協会は法人・個人の会費を主な財源として日印友好促進のため活動を続けております。

協会の主旨(日印相互理解を基礎に、両国の親善を増進する)に賛同していただける法人・個人であれば、規模の大小・職業・年齢・性別を問わずご入会を歓迎致します。

特典としては会報『月刊インド』の無料配布のほか各種催し物・会合のご案内、ご招待、旅行・ヨガクラス・語学講座等の優待、図書・テープ・ビデオの貸出し、日印交流事業への優先参加等があり、会員証(更新については希望者のみ)を発行致します。法人会員に対しては上記の他、政治・経済関係報告書の郵送及び日印経済懇話会(社会・経済の勉強会)への案内を致します。

年会費:個人	6,000円/口	入会金:個人	2,000円
学生	3,000円/口	学生	1,000円
一般法人会員	100,000円/口	法人	5,000円
維持法人会員	150,000円/口		(一般、維持法人会員共に)



財団法人 日印協会 〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階

ホームページ: <http://www.japan-india.com/>

電話: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com

E-mail アドレスを変更しました。

